

意識流の現象学

——意識流の反省と根源的な時間構成的意識流の反省の不可能性の問題——

和田 渡

I 序論

フッサールが数学や心理学、論理学の批判的考察や、新カント派やデイルタイなどとの思想的交流を通じて深化、発展させた現象学の展開のなかで、彼が当初から強い関心を持ち、生涯に渡って思索し続けた問題の一つが、「生き生きと働くもの」すなわち人間の意識活動の在り様であった。フッサールにとつての意識とは、事物や他者が自我に現出し、自我によつて意味づけられ、それが経過、変換する諸相を示すだけにとどまらず、そこにおいて自我が登場しては退却する場所をも示すものであり、そこで繰り広げられる多種多様な「ドラマ」の成立過程を反省して、その骨組みを言語化することこそ彼の目指したものであった。しかし、そのために何故半世紀以上に及ぶ思索が必要であったのか。その理由は、言うまでもなく、意識という場所が役者の登場を受入れるだけの劇場の舞台とは異なり、それ自身が動き、待ち構え、受入れたものを保持し、再生し、それを通じて不断に自己形成を繰

り返すような、比類ない特徴をそなえた「出来事 *Vorkommis*, *Ereignis*」であり、その細部の、刻々と変化することを止めない多彩な経過は、短時間で事足りりとする観察の対象ではないからである。いわゆる「意識作用」と「意識内容」の相関関係が成立する場所としての意識のダイナミズムを反省するためには、洗練された視線と視線を送る側の「成熟」が必要であり、長期に渡る悪戦が何としても避けられないのである。

意識が不断に、生き生きと動いて止まないということ、そこに現象学的反省にとつての最大の困難がある。それというのも、対象を固定化して把握する反省は、反省がなされている間にも刻々とその姿を変え続ける意識の断面しか捉えられず、ある意識の働きを追跡する視線はその手前に、あるいはその先にあつて変化する意識を同時に捉えることはできないからである。にもかかわらず、反省を続行することによつて意識の運動を、そのニュアンスに満ちた細部にいたるまで詳細に把握すること、その困難への挑戦がフッサール現象学を特徴づけるものである。動いて止まない

意識は、反省的な視線によって対象化される場合に、どのような対象として捉えられるのか。意識の流れ続ける過程において、現に現れたものはどのように過去化するのか。過去化したものはどのような運命をたどることになるのか。現在の流れと過去化した流れとはどのように関係するのか。未来に向かう意識の流れと過去化した流れとはどのように関係するのか。こうした問いの一つ一つに答えることが重要な課題の一つだったのである。¹⁾

本稿では、こうした問いに関してフッサールが考えていたことを『論理学研究』(以下、『論研』と記す)、『厳密な学としての哲学』(以下、『厳密学』と記す)、『イデーナー』に即して検討した後、意識の流れに関する反省が集中的に繰り返される時期である一九一八年に書かれた論文と、それとほぼ同じ時期のものである『ベルナウ草稿』の一部に限定して考察してみたい。それを通じて、意識流の反省と不可能性に関する問題を照射し、フッサール現象学における時間意識の謎の一端に迫ることが本稿の課題である。

Ⅱ 体験の流れ——『論研』に即して——

『論研』第一巻第五章の第二九節で最初に「流れ Fluss, fließen」について言及される個所では、意義や概念的表象内容、経験的色彩内容の流れについて述べられるのみで、「心的諸体験の流れ」という表現が現れるのは、第七章第三七節である。²⁾ 経験的、個別

的存在と理念的存在的意識の仕方の相違が検討課題となるその節においては、両者が到来する場所として心的諸体験の流れが言及されているにすぎない。しかも、この表現は唯一度現れるのみであり、フッサールの関心は体験の流れの性格よりも、理念的存在が意識に与えられる仕方に向けられている。同章の第四〇節にも、有機体の生き生きとした統一を可能にするものの「生成の流れ (Strom)」⁴⁾に関する言及が見られるが、体験流そのものについての考察はなされてはいない。第二巻の序論の第二節では、第一巻の第七章と類似して、イデア的法則がどのようにしてリアルな心的諸体験の流れ (Fluss) に入り込んできて、認識者に所有されるかを問うことの重要性が指摘されている。⁵⁾ また第二巻の「一 表現と意味」の第三章第二八節でも、客観的意味と主観的意味の相違を論ずる文脈において、主観的な心的体験の流れ (Fluss) についての言及がある。「二 スペチエスのイデア的単一性と近代の抽象論」の第一章第六節では、体験の心理学的説明 (Erklärung) をする際に注目すべき思考体験や他の諸事実が結合する経験的諸連関が、リアルな生起の流れ (Fluss) の中に位置づけられており、第五章の第三九節では、流れ (Fluss) が内在的諸現出と諸内容の流れおよび感性的(特殊に心的な)体験の流れとして言及されている。⁷⁾ しかし、いずれの場合にも、「流れ」そのものに強い関心が向けられているわけではない。それに対して、意識流という言い方が頻出するのが、「五 志向的体験とその《内容》」の第一章第一節から第七節にかけてである。とは言え、

その特徴は第二版に見られるものであり、初版の段階でのフッサールは、意識流を現象学的自我と呼ぶことの方が多かった。以下で見るように、第二版での改訂箇所における「意識流」の多用は、『論研』出版以後のフッサールが次第に意識あるいは体験の流れに対する反省を深めていったことを証していると言つてよいであろう。

周知のように、第一節では、三種類の意識概念が示されている。第一は、第二版で書き換えられた「経験的自我の実的な現象学的要素全体としての、すなわち体験流の統一」の中における (*Einheit des Erlebnisstroms*) の心的諸体験の織り合わせとしての意識⁽⁸⁾である。(初版は「精神的自我の現象学的要素としての意識」(意識Ⅱ心的諸体験の《束》ないし織り合わせとしての現象学的自我⁽⁹⁾)となつている。) 初版にも第2版にも共通して見られる「心的諸体験の織り合わせとしての意識」ではあるが、後者においてその意識が体験流の統一との関連において把握されている点に、フッサールの体験流への関心の増大を見てとることができる。第二は、「自己の心的諸体験の内的覚知 (*inneres Gewahrwerden*) としつつの意識⁽¹⁰⁾」であり、第三が「あらゆる《心的作用》ないしは《志向的諸体験》の総称としての意識である。⁽¹¹⁾」以上の内で特に念入りに考察されることになるのが第三の志向的諸体験としての意識であるといえ、第二版における体験流という表現の加筆に注目すれば、フッサールが意識をその流れとの関連のなかで捉えることに腐心していたことを忘却すべきではない。

い。例えば第三節では、諸作用の所有の説明として述べられた「諸内容は、意識統一体に内在する、すなわち経験的自我の現象学的な意味での統一された意識流に内在する、部分的要素である⁽¹²⁾」という一文の「すなわち」から「内在する」までが第二版における加筆であり、同節の最後でも「そのつどの現象学的な意識流」という表現が加筆されている。また第六節では、「意識流の統一」の加筆に加えて、意識流と体験流に関連して大幅な文章が書き加えられている。前者に関しては、意識流に内属する時間(意識流それ自身と共に現出する時間、意識流がその中で流れる時間)の呈示形式と意識流の統一とが関連づけて語られ、さらに重要な点として、意識流の顕在的な各位相は、その中で流れの時間地平の全体を呈示する以上、意識流のあらゆる内容を包摂する形式を所有していることが指摘されている。⁽¹⁴⁾ さらにまた、第二版で加筆された同節最後の一文では、現象学的なものへの還元によつて、リアルな自己完結的な統一であり、時間的に発展し続ける統一としての体験流が解明可能になることが強調されている。⁽¹⁵⁾ 第一一節の最後でも、体験に「流」が加筆されているのである。⁽¹⁶⁾

以上に指摘した『論研』第二版における意識流もしくは体験流に関わる加筆から明らかなように、フッサールは、「心的諸体験の織り合わせとしての意識」の生成を「流れ」との関連を考慮して把握する方向に向かつている。意識の流れが統一的な流れの中での流れであるという点に注意が払われ、その意識様態がいかなるものであるかに考察の目が向けられているのである。しかし、

この問題は、主として意識と対象の相関関係の解明に従事する『論研』では十分に検討されるにはいたっておらず、問題の指摘段階にとどまっていると言わざるを得ない。

Ⅲ 意識流への視線——『厳密学』に即して——

『厳密学』においては、『論研』の第一巻第五章第二九節におけるのと同様に、「流れ」が表現の流動性に関して用いられている一部のケースを除けば、「流れ」はもっぱら意識の流れとして捉えられている。この論文では、知覚、想起、注意を初めとして多様な作用を行なう意識の全体的な研究の必要が強調されるが、その際の鉄則は、「内的直観の様々に可能な方向において現れる所与を体系的に「分析」し、「記述」すること」¹⁸⁾である。換言すれば、反省において観取される体験を、分析、記述の対象とすることである。フッサールによれば、反省の視線の下に現れるそのつどの体験の相は、現れるや否や後退し、絶えず過去に沈下していくものとして、一つの絶対的な流れ (Fluss) の内に現れる¹⁹⁾。しかし、反省的に把握されるのは、このようにして、現在において現れ、次第に過去へ沈下していく現象だけではない。想起の作用によつて、過ぎ去ったものが現在に蘇る現象も把握されるのである。この現象に注意すれば、それすらも現れるや否や過去への沈下を余儀なくされるとしても、「一つの絶対的な流れ」の内には、現在から過去への沈下と、過去から現在への浮上という二つの流

れの方向を認めなければならない。想起の問題が後者の流れと関係するのであるが、この問題の具体的展開は『厳密学』には見られない。そこでは、むしろモナド的な統一の内に組み込まれた意識そのものの流れが強調されている。「意識は二つの方向に果てしなく続く、現象の流れであり、言わばあらゆるものを貫く統一の指標である、すべてを貫通する志向的な線、つまりいかなる精密な時計でも計測できない時間、始めも終わりのない内在的な時間の線をもった現象の流れなのである」²⁰⁾。前後の文脈からは、「二つの方向」が何を示すか明確ではないが、常識的に判断すれば、一方は、意識の流れそのものが向かう未来への方向であり（現在↓未来）、他方は、現に体験されたものが過去へと沈下変様する方向（現在↓過去）であろう。しかし、両者の方向は、後に『ペルナウ草稿』において詳述されるが、相互に無関係ではなく、むしろ相互に浸透し、相互に影響を及ぼしあうような緊密な関係にあり、それゆえに意識流の比類ない特徴が幾度となく強調されるのである。『厳密学』に即して言えば、意識の流れは志向的な線を持った流れであり、この線は計測できず、客観的時間の次元には属さない。それは、開始時点も終結時点も持たない内在的時間の流れなのである。何故、意識流に始まりも終わりもないと言えるのかは別にして、意識が志向的で、内在的な時間の流れという次元を持つという指摘は、意識現在を非現在との関連で把握する発生的現象学の展開を考えれば、きわめて重要なものと言わざるを得ない。

以上で述べたように、『厳密学』においては、反省によって観取される広大な意識領野が不断の流れの内にあり、反省は常に「そのつどの意識流の内在的な生の統一」へと立ち戻らざるをえない点が主張されているのみで、意識流の反省の可能性を問う試みや、意識流そのものの立ち入った検討に主眼が置かれているわけではない。

Ⅳ 体験流への視線——『イデーニー』に即して

『イデーニー』において、特に体験流に関する言及が見られるのは第二編の第二章「意識と自然的現実」であるが、そこでは自我の諸作用が現れ、相互に混じり合い、結合しながら変様する場として体験の流れが把握されている⁽²²⁾。自我の諸作用は不意に出現するのではなく、その作用の成立を促す体験の流れなしには可能にならないのである。「意識諸体験は、具体化の全体的な充実を伴いながら、各々の自我にとつては具体的連関の全体性において、つまり体験流において現れてくるのであり、また意識諸体験は、それ固有の本質によって連続的に体験流に融合するのである」⁽²³⁾。ここで重要な問題は、意識の諸作用が体験流に融合する仕方である。「意識の作用が流れのなかで現れ、流れのなかへ融合していくとは、いかなる事態を指すのか」という問題である。周知のように、こうした問題は、後に発生的現象学の展開のなかで繰り返して考察されることになるが、『イデーニー』においても、

既にその展開に先だつて、意識の統一、意識総合の問題として言及されている。しかし、それは極めて断片的でしかない。すなわち、意識の統一とはいかなる事態であり、意識の総合とはどのような状態を示すものなのかは、立ち入って検討されてはいないのである。体験流における顕在性から非顕在性への移行と非顕在性から顕在性への移行という現象の指摘と、それに関連する体験流の多層性の指摘のうちに、意識総合の問題への示唆が認められるにしても、総合の問題に関する入念な記述はない。体験流の統一の問題にしても、その詳細な考察は先送りにされているのである⁽²⁴⁾。

体験流に係わるもう一つの重要な問題は、同章の第四節において述べられた体験の反省可能性に関するものである。現象学の生命線は反省であり、現象学的記述の一切は反省の視線の下にある。しかし、体験が流れであるとすれば、そこには既に流れ去った現象(過去)が含まれている筈であり、現に流れざる現象が過去へと合流しつつある筈であり、現在も流れつつある筈である。しかも、こうした流れるという特徴をもつた意識が、『イデーニー』の用語で言えば、「開かれた果てしなさ」⁽²⁵⁾を持つとすれば、はたして反省の視線が無限な流れにどの程度まで向かうかが問われなければならない。こうした体験の流動性とその反省に係わる問題は、次のように述べられている。「体験といえども、完全に知覚されているわけではないし、決してそうなるものでもなく、体験はその完全な統一においては十全的には把握されえない

のである。体験はその本質上は、一つの流れ (Fluss) であり、この流れの方に反省的な視線を向けながら、われわれは今の時点から言わばこの流れにそって泳ぐことができるが、その際に流れ去った過去の流れの部分は、知覚にとっては既に失われてしまっている。われわれは直接に流れ去ったものの意識を、ただ把持の形式においてのみ、ないしはまた回顧的な再想起の形式においても持つのである。そして最終的には、私の全体験流は、「共に泳ぎながら」完全に知覚把握することが原理的に不可能であるような体験統一なのである⁽²⁷⁾。端的に言えば、反省は体験を汲み尽くすことができないのである。言い換えれば、反省は体験の一側面を捉えることができるのみである。たとえば、把持的な意識とその意識によって把握されているものに反省の視線が向かう時には、それ以前の把持的な意識変様の流れは把握されえないし、再想起の意識による経過した過去の再現過程の反省が働く場面では、体験の現在の流れは反省の外にあるのであって、体験の流れは「共に泳ぎながら」追跡可能であつても、追跡されたものの背後には、いまだ追跡されないものの膨大な地平が潜んでいるのである。とすれば、体験の反省可能性と不可能性という問題をどのように考えるべきであろうか。しかし、この問いは『イデーニ I』の時期においては探究されてはいない。そこでは、体験の把握不可能という側面が指摘されているだけで、重点は、体験の流れが意識に与えられる仕方の不可疑性の方に置かれているのである。「思考する者」としての私のものである体験流が、たとえば

かに広範囲にわたっていまだ把握されておらず、経過し去った流れの区域の面でも、また将来の流れの区域の面でも知られていないとしても、私は流れる生をその現実的な現在において目指すや否や、そしてその生を純粹にそれ自身として受け取り、またその際私自身をこの生の純粹な主体として受け取るや否や、……私は端的にまた必然的にこう言わざるを得ない。すなわち、私は存在する、この私の生は存在する、私は生きている、つまりコギトと⁽²⁸⁾。超越的知覚の疑わしさに比べて、内在的知覚の明証性に力点が置かれており、体験流の反省そのものの可能性についての問いは出されていないのである。しかし、それはこの問いが以後も提起されなかったということではない。その点を次に検討してみたい。

V 意識流の反省の可能性の問いの萌芽

——一九一七年の論文に即して——

「現象学と心理学」(一九一七年)と題する論文の付録「根源的な時間意識について」は、意識流の反省の可能性を考えるうえで重要な位置を占めている。その冒頭で、フッサールは、越論的な純粹意識への現象学的還元が現象学と超越論的哲学の基礎づけるために不可欠であるとしながらも、実際には、還元がそのつどの意識現在を超えるものではないと述べている。⁽²⁹⁾「顕在的な現在を超えて広がる純粹な意識流という所与性についてどうなのかは、

検討されなかった⁽³⁰⁾。反省的な視線が届かない領域の意識とその相関者に関する一般的で法則的な認識が可能かについては、全く暗闇のままであつたとも述べられている⁽³¹⁾。こうした一種の告白は、『論研』から『厳密学』を経て『イデーナー』などにおける度重なる意識流への言及にもかかわらず、意識流そのものの反省可能性については詳しい考察がなされてこなかったことを意味する。現象学的な反省は、反省されるものとの相関性において可能になるが、反省されるものに密接に係わりながらも、それ自身反省されるものとはならない流れの位相について、語る事ができるのか、できるとすればどのような仕方なのか。それが問題として顕在化してくるのである。とは言え、当該の論文において、この問題に関するはつきりした解答が示されているわけではない。示されているのは、現象学的な還元を通じて反省の可能性を検討しなければならぬような領域が開示されてくるということであり、その領域こそが意識の構成的な働きの前提であるということの確認なのである。この点を次に考察してみたい。

この論文におけるフッサールの主眼点は、『厳密学』と共通するが、意識の働きを流れとの関係において把握することである。まず時間的な存在は、それが自然的な存在であれ、超越論的存在であれ、原理的に、知覚の流れ (Fluss) のなかでのみ知覚されるのであり、そのつどの新たな知覚の契機が原湧出的な知覚位相である。そして意識のあらゆる作用が流れの内にあるということとは、原現在がただちに「たつた今過ぎ去つたもの」になり、新た

な原現在の出現とともに、「たつた今過ぎ去つたもの」がさらに一層過去化することである⁽³²⁾。「絶えざる流れ⁽³³⁾」の中で、知覚の把持的変様、変様の変様といった事態が生起しているわけである。フッサールはこの流れを念頭に置きながら、現出する事物の知覚を、内在的時間の内でのその知覚を構成する意識の多様性にまで引き戻し、さらにその多様性を内在的時間対象が構成される際の多様性にまで引き戻している⁽³⁴⁾。この後者の多様性、「より高次の意味での絶対的所与性⁽³⁵⁾」こそが、「(過去と未来という)二つの地平へと無限に開かれた現象学的な時間の領野⁽³⁶⁾」であり、「より高次の段階の連続的な意識の多様性⁽³⁷⁾」である。この領野を、あらゆる種類の対象構成を可能にする根源的な時間意識の流れと言え換えることも可能であり、この流れが絶えず流れ続けていなければ、予持的な意識の働きも、現在の知覚的意識も現象学的な時間における出来事として生起することはなく、現在における知覚が把持されながら次第に過去の「暗闇」の中へと変様し、沈澱していくという出来事も生じることはないのである。フッサールは、また、最初の段階の超越論的反省において、内在的な知覚に對してコギトとして、超越論的に純粹な体験として与えられるものは、現象学的な時間の形式において構成された出来事であるとも述べ、反省された体験を、その体験が生起する流れとの関連において把握している⁽³⁸⁾。彼によれば、そのつどの知覚的な出来事が生起するのは「明るい原現在 die helle Urgegenwart⁽³⁹⁾」においてであり、出来事は流れのなかで生起する以上、それはただちに

「たった今」へと転化し、「暗い過去地平」のなかへと移行することを止めないのである。⁴⁰⁾

とは言え、現在から過去へ、さらに過去の過去へと次第に流れさつていく流れを反省が一挙に見渡すことはできないとすれば、反省の視線を超えた流れについてどのように語ることができるのか。実は、この問題こそが、本節の冒頭で引用したフッサールの問いによって問われていたものである。すなわち、顕在的な現在を超えて広がる意識の流れに関する反省可能性の問いである。しかし、本節で扱った論文においては、反省を通じて最後には反省を超えるような意識の次元、内在的な時間を構成する「根源的な時間意識流」の次元という「無限に開かれた現象学的時間領野」にたどりつくことが幾度となく強調されているものの、冒頭の問いについての解答は示されていない。

この問いをバネにした思索が凝集したものがベルナウ時間草稿である。しかしそこにおいても、上述の問いにはつきりした答えが示されているわけではない。その問いに導かれた思索が多種多様な仕方で繰り広げられているだけなのである。そこで、次にこの草稿の一部に絞って、「根源的な時間意識流」の反省の可能性と不可能性に関する問題を検討してみたい。

Ⅵ 根源的な時間意識流の反省とその限界

ベルナウ草稿は、流動的な意識の経過位相、その意識において

構成される時間対象性の諸相、流動的な意識を意識する意識、現象学的時間における対象構成と客観的時間の構成、時間と自我、内的時間意識の経過様態(予持、知覚、把持、把持的変様、想起)などに関して、フッサールが集中的に行なつた思索の軌跡に他ならないが、そのなかで特に繰り返して考察されているのが、意識の諸作用が遂行される場所としての意識流とその意識流に関する反省の問題である。以下では、その問題を「直観的時間様態性の流れ (Fluss) と流れること (Fließen) の意識⁴¹⁾」と題する、第二部の第五番のテキストの範囲内で考察してみたい。そこで注目に値するのは、フッサールが直接的な知覚と並んで、「時間と時間諸様態性を原初的に構成する体験⁴²⁾」、「原初的に構成する(直観的)時間意識の流れ⁴³⁾」に言及し、その流れを、理念的には目下の現在と現在時間の無限な連続体とみなすことができるとし、そこにおいて持続的な統合の働き (Integration) によつて究極的には時間そのものが無限な時間として開示されるとしている点である。⁴⁴⁾しかし他方で彼は、顕在的な無限性を直観することは不可能であり、諸現在の開かれた無限性という理念を形成することができるのみだとも述べている。⁴⁵⁾こうした見解の背後に見え隠れするのは、意識が絶えざる流れであり、その中断や停止が反省的に確認されない以上、意識は無限に流れ続けていると考えざるをえないが、その事態を直視することはできないという考え方である。とは言え、こうした考え方が終着点なのではない。周知のように、フッサールは一方で意識の永遠の流れに言及し、他方で、

その流れの位相の反省を繰り返すことを止めなかったのである。現に知覚されたものが把持的変様を経て次第に過去の暗闇の中に沈下する時、その流れはどこまで続くのか。反省の視線を外れた流れは、その先の流れにおいてどのような流れとして生起しているのか。過去化したものが想起によって現在に呼び戻される時、その流れは過去化する不断の流れとどのように関係するのか。こういった問いが、意識流への反省と結びつく問いである。さらにまた、流れを意識するとはいかなることなのか。流れを意識することにおいて、その意識もまた意識されているのではないかという問いも提起される。

こうした意識流における意識のありようを問題にするのが第二節「流れ去る現在についての流れる意識はいかにして可能か。目下の与件の流れとその与件の時間諸様態性の流れ。現象学的な本質法則⁽⁴⁶⁾」である。その冒頭では、時間直観（時間対象的知覚）の流れには現在の流れが対応し、時間直観は単に流れであるにとどまらず、流れの意識でもあると述べられ、対象把握作用においては対象にとまらず、作用そのものもまた意識されているという様態が示唆されているのである。フッサールは、この様態をいかにして適切に記述できるのかという問いを立てているが、この問題は次のように考えられる。すなわち、対象を把握する作用が意識の流れの中での作用である限り、その作用は流れ去り、流れ去ることによって意識化されるのである。流れは隔たりを生み、その隔たりを介して反省の意識が働く条件が整うのである。この

場合の、ある作用が対象と同時に自らをも意識している様態は、流れを反省する働きが、流れのみならずみずからの反省をも意識することと重ね合わせて捉えることができるであろう。フッサールはこの問題を、さらに「流れはどのようにして意識に与えられ、流れを反省するということがいかなることか」という根本的な問いに結びつけて、次のように述べている。「顕在的な意識現在のあらゆる契機において、この契機のなかで直観されるものだけが意識されるのだとすれば、流れることは原初的には意識化されえないであろう⁽⁴⁸⁾」。逆に言えば、直観されるものが意識されなくなり、その時すでに別のものがそれに代わるものとして意識されているという事態が生じなければ、流れは意識されないのである。「意識があらゆる位相において、その対象的な位相についてのみ何かを知り、自らを超えては何ものも知らないのだとすれば、流れつつ、流れる対象を意識する意識（今や自己自身をさえ流れる意識として意識する意識）は不可能であろう⁽⁴⁹⁾」。この表現に示された、流れる意識の意識という一種の流れの自己意識に関しては、ベルナウ草稿でもフッサールは、初期時間意識論當時からの問題を受けて、「いかにして意識の継続（Sukzession）が継続の意識になりうるのか⁽⁵⁰⁾」という問いを改めて提示している。この問いは、言い換えれば、流れ続けている意識が、翻って自らの流れに気づくという事態がどのようにして生起するのかという問いである。この問いにおいて、重要な点は、意識の継続ではなく、継続の意識の方であり、それはフッサールによる類似の問い

の反復からも明らかである。「継続の意識はいかにして可能か、この意識の可能性をいかに理解できるのか」⁽⁵¹⁾。この問いに対する答えは次のようなものである。すなわち、意識のあらゆる瞬間に継続の一位相以上のものが直観的に与えられているがゆえに、継続を意識できる筈だということである⁽⁵²⁾。単純化して言えば、ある位相だけでなく、その位相の前後の経過位相も同時に意識に与えられるがゆえに、そこにおのずと継続性の意識が可能になるということである。その意識が他ならぬ流れの意識である。

その意識は、第三節「現在における流れること (Strömen) の知覚と流れること (Fließen) の生き生きとした意識。流れる現在の段階継続」でさらに検討されており、次にその問題点を考察してみたい。この節でも強調されるのは、流れるものとしての意識は、原に現れている位相を意識するだけでなく、流れに関してそのつどの契機を超えて広がっているということである⁽⁵³⁾。しかし、この節において特徴的なことは、流れを把握するに際して、流れの記述の暗黙の前提となるフッサル自身の反省の視線が全面に現れた記述がなされている点である。「私が現在の経過 (Ablauf)、流れ (Fluss) において生きる場合、たとえば何らかの目に入った現在は、連続的な仕方、別の現在へ、そして再び別の現在へと流れていく。私が視線を何らかの現在に向けるならば、私はまさに経過し、そのようなものとして特徴づけられた現在の領野を、視線において、「当該の契機において」見渡すことができるのである」⁽⁵⁴⁾。こうした反省の視線によって意識に与えられる自分の現

在、現在から過去への変様、変様の変様、現在における未来への先行的意識 (Vorbewußtsein)、未来から現在への移行、そうした現象を貫く流れ (根源的な時間構成的意識流) などを記述することをフッサルは自らに課しているのである。こうした現象は概括的には、「生そのものは、流れることの内にあつて、流れることの生き生きとした意識である」⁽⁵⁵⁾という表現によって集約されている。流れる生は、流れることを意識する生でもあるという生の自己意識が、ここでも強調されているのである。「意識が流れ、意識がその固有な本質に従つてこの流れの意識でないとするれば、われわれは流れについては全くもつて何かを知ることはないであろう」⁽⁵⁶⁾という表現によって強調されているのも、流れる意識による流れそれ自身の自己把握という現象である。

こうした意識の流れについて記述するのが、第四節「流れの原事実の様々な段階。〈流れにおける現在の出現と後退。流れの記述における様々な反省の視線の方向〉」である。この節における記述の特徴は、流れを新たな今の絶え間ない出現、生成した今の刻々とした後退、それらの過去への絶えることのない転化、すでに存在している過去のより遠い過去への絶えることのない転化、あるいは、現在の絶えざる自己産出、現在の過去への絶え間ない自己転化とする把握から明らかのように、流れが現在、過去との関連で把握されている点である⁽⁵⁷⁾。言うまでもなく、こうした記述を背後で支えるのは「注意の視線」⁽⁵⁸⁾であり、それを通じて、現在を起点とする過去への転化という流れの位相が把握されている。

現在から未来へと向かう流れに注意の視線が向けられる場合には、現在の未来への進入、過去の現在への浸透といった現象が記述されるはずだが、この節においては、「視線の後ろ向き」⁵⁰⁾に拘束される形で、主として現在に侵入したものが過去へと沈下、変化する過程が記述されているのである。

VII 結論

以上、『論研』から『ベルナウ時間草稿』までを中心にし、フッサールが意識流の反省に関して繰り広げた思索の一部に限定してその問題点を指摘した。しかし、これまでの限定した範囲の草稿においては、Vの冒頭でも言及したように、「根源的な時間構成的意識流の反省不可能性に関する問題」をフッサール自身がどのように解決しようとしたかは明らかではない。この問いは問いとして保持されたまま流れの反省の背後に退いて、主題的に検討されてはいないのである。このことから一つの結論として次の点を指摘することができであろう。すなわち、フッサールは、意識流の反省の遂行によって明らかになる意識流における反省不可能な次元（根源的な時間構成的意識流）が反省にその限界を告げることになると意識していたとしても、その問題を主題化して反省の限界について考察することよりも、多様な姿を見せることを止めない意識流の経過位相の反省そのものに余念がなかったのである。そうした反省の労苦が、後に発生的現象学の展

開を経て、C草稿として結実することにもなるのである。したがって、意識流の反省とその限界に関する問題は、後期現象学の展開のなかで再度検討されなければならないし、そこで意識流と関連づけて論ずべき問題も多岐に渡る。現象学的時間における内在的時間対象性の構成、客観的時間の構成、原流動、ノエシス的、ノエマ的時間性、想起と再生に関する問題など枚挙にいとまがないのである。それらの詳細な検討は、稿を改めて行いたい。

注

- (1) 周知のように、意識の流れと流れの反省に関しては、古くは高橋里見の先駆的な論文がある。『全体の立場』岩波書店、一九六九年に納められた「フッサールにおける時間と意識流」「時間の意識と意識の時間性」参照。しかし、これらの論文はフッサールの時間意識論の丁寧な読みに基づいた緻密な解説が主であって、フッサールの思想そのものの問題を論じたものではない。『イデーナー』に関連づけながら体験の流動性と流動的体験の反省的把握可能性を論じたものには次のものがある。(Vgl. Hermann Drie, *Husserls Psychologie*, Walter de Gruyter & Co., Berlin 1963, S.172-174.) また比較的新しいところでは、ゾンマーがフッサールにおける意識流とその反省可能性に関して、メタファーの問題を絡めた卓越した考察を行なっている。(Vgl. Manfred Sommer, *Lebenswelt und Zeitbewusstsein*, Frankfurt am Main: Suhrkamp 1990, S.176-188.) 『論理学研究』における三つの意識概念を検討する際に、「意識流を問題にしたものには次のものがある」。(Vgl. Dan Zahavi, *The Three Concepts of Consciousness in Logische Untersuchungen*, Husserl Studies Vol.18, No.1, 2002, p.51-64.)
- (2) Vgl. *Husserliana* B. XVIII, S.108.
- (3) *Ibid.*, S.134.
- (4) *Ibid.*, S.150.

(5) Vgl. *Husserliana* Bd. XIX/1

(6) *Ibid.*, S.124.

(7) *Ibid.*, S.209f.

(8) *Ibid.*, S.356.

(9) *Ibid.*, S.356.

(10) *Ibid.*, S.356.

(11) *Ibid.*, S.356.

(12) *Ibid.*, S.362.

(13) *Ibid.*, S.369.

(14) Vgl. *ibid.*, S.369.

(15) *Ibid.*, S.369.

(16) Vgl., *ibid.*, S.389.

(17) Vgl. *Husserliana* Bd. XXV, S.20.

(18) *Ibid.*, S.18.

(19) Vgl. *ibid.*, S.29f.

(20) *Ibid.*, S.30.

(21) *Ibid.*, S.38.

(22) *Husserliana* Bd. III, S.71.

(23) *Ibid.*, S.75.

(24) Vgl. *ibid.*, S.78f.

(25) Vgl. *ibid.*, S.84.

(26) *Ibid.*, S.72.

(27) *Ibid.*, S.103.

(28) *Ibid.*, S.106.

(29) *Husserliana* Bd. XXV, S.119f.

(30) *Ibid.*, S.220.

(31) Vgl. *ibid.*, S.220.

(32) Vgl. *ibid.*, S.220.

(33) *Ibid.*, S.220.

(34) *Ibid.*, S.221.

(35) *Ibid.*, S.221.

(36) *Ibid.*, S.221.

(37) *Ibid.*, S.222.

(38) Vgl. *ibid.* S.224.

(39) *Ibid.*, S.223.

(40) Vgl. *ibid.*, S.223.

(41) *Husserliana* Bd. XXXIII, S.90.

(42) *Ibid.*, S.93.

(43) *Ibid.*, S.93.

(44) *Ibid.*, S.93f.

(45) *Ibid.*, S.94.

(46) *Ibid.*, S.94.

(47) *Ibid.*, S.94.

(48) *Ibid.*, S.95.

(49) *Ibid.*, S.95.

(50) *Ibid.*, S.96.

(51) *Ibid.*, S.97.

(52) Vgl. *ibid.*, S.97.

(53) Vgl. *ibid.*, S.100.

(54) *Ibid.*, S.100.

(55) *Ibid.*, S.103.

(56) *Ibid.*, S.103.

(57) *Ibid.*, S.104.

(58) *Ibid.*, S.105.

(59) *Ibid.*, S.105.

(二〇〇二年七月十二日受付)
(二〇〇二年九月六日掲載決定)